

こうしたことには表われているとおり、いまの教育には民族、国家、歴史といったものが抜け落ちている。とにかく日本人は精神的に非常に弱くなっているような気がしますね。占領政策は成功したのですよ」

熱っぽく語る森山の瞳が一段と輝きを増していたことが妙に印象深い。またひとつ体を張って取り組むテーマを見つけたことで、森山の体内の血が騒いでいたのだろう。

とどまるところをしない組織率の低下、共産党系と社会党系、それに加えて社会党系内の主流、反主流の内部抗争などによって日教組は今、自壊への道を歩んでいる。森山が健在であれば、いよいよ腕の振るいどころとばかりに張り切っていたはずである。教育界の大掃除から教育そのものの大掃除へ。森山の出番はまだまだこれからだった。

第十章 全遯との死闘、そして勝利

政治の季節から経済の季節へ

森山の選挙がようやく安定軌道に乗った昭和三十五年は戦後政治の一つの節目でもあった。年初から日米安保条約の改定をめぐる学生、労組などの政治運動が活発化し、世情は騒然としていた。いまになって振り返れば、あの騒ぎはなんだったのかと慄然とする思いだ。安全保障の問題はすぐれて国際問題であるにもかかわらず、国際情勢の検討を抜きにこれを純然たる国内問題として捉えていた。国際化が常識となっている今日の世の中だから余計にあの事件の意味が不可解なのだろう。しかし当時、その渦中にある「革命近し」を予感するものも少なくなかったようだ。

この年一月二十四日、多党化時代の幕開けを告げる民社党の結成大会が開かれた。五、六月には国会周辺を連日デモ隊が取り囲んだ。その騒ぎは樺美智子の死で頂点に達し、岸内閣は新安保条約批准（六月二十三日）後に退陣するとの退陣表明を行なってようやく安保騒ぎは終焉した。

のだ」

たのですが、僕は当選四回で初の政務次官です。だからもう少し別な所になるかと思っていましたがね。しかし結果的にみると、かえってよかったと思います」

森山の郵政政務次官在任はわずか七か月だった。しかしこの間に森山がした仕事は前任者の誰もが成し得なかったほどの大仕事だった。

当時、全通（郵政省の職員組織・正式には全通信労働組合）は絶大な勢力を誇り、当局側は敗走を続けている時代だった。多くの職場は組合管理の様相を呈し、士気は全国的に低下していた。それというのも当局側に労務の熟達の士がなく、組合の無茶な要求がほとんどそのまま通るといいう状況だったからだ。ここに労務の専門家・森山が乗り込んだのである。

全通との闘いで見せた森山の手腕は政界、労働界に「労務の森山」を強く印象づけた。郵政政務次官に就任した森山はまず時の郵政大臣・小金義照から「全通との問題は全面的にまかせろ」とのおスミつきをとりつけた。森山は初登庁のその日、いきなり「看板事件」をひきおこす。

当時、郵政省は狸穴まみなのソ連大使館前にあったが、森山は車から降りて玄関に足を踏み入れようとして、思わず目が疑った。

玄関の右側には「郵政省」と彫り込まれた小さな銅板がかかっている。目を左側に移すと、この銅板の二十倍もある木製の「全通信労働組合本省本部」の看板がかかっていた。

「これはおかしい。こんなことを放置していることが、全通に押しまくられている現状につながるのだ」



郵政政務次官として記者会見（昭和36年）。

岸首相退陣を受けて七月十九日、池田内閣が成立した。

一方、一月から激しい闘争が展開されていた三井鉱山三池炭鉱の争議も十一月に入ってようやく終結した。

「寛容と忍耐」を標榜し、高度経済成長と所得倍増を政策の柱に掲げた池田内閣は、安保騒動の後遺症を短時日のうちに消し去り、国民の目を経済再建一点に集中させることに成功した。

時代は混乱期から安定期へ、政治の季節から経済の季節へと、大きく転換を遂げる。

この年十一月二十日に行われた第二十九回総選挙で、再度返り咲いた森山は第二次池田内閣の成立とともに、十二月九日付けて郵政政務次官に任命された。

「郵政政務次官は僕が望んでなかったわけじゃありません。当時はだいたい当選三回で政務次官だっ

森山は即座に管理担当者呼んで怒鳴りつけた。「どちらが家主なんだ。間借人の看板の方が大きいなんて、そういういい加減なことを放置しているから、組合になめられるんだ」

全通の看板はその場ではずされた。まずは出会い頭の一撃といったところだった。それ以来、全通の看板が玄関にかけられたことは一度もない。

森山の問題に対する取り組みは常に正攻法、とにかく筋を通すことである。おかしいものはおかしい、悪いことは悪い、安易な妥協や悪慣行を放置しないという、いつてみればきわめて単純明快な論理だ。しかし敵も否定できないこの明快さ、道理こそが労務には必要なものである。

省内で行なった初の訓示でも森山は幹部たちにごう檄をとばした。

「とにかく、正姿勢を持って労働組合に臨め。筋を通すことが肝心だ。スト↓処分↓スト↓処分が悪循環なのではなく、スト↓処分なし↓ストこそが悪循環なのだ。無法には法で対決するしかないと知るべきだ」

そうはいっても森山が闘いを挑んだ全通は簡単に筋が通せるほど手軽な相手ではなかった。

全通との勝負

全通は終戦直後に戦後初の全国単一労組として結成された組合である。共産党系の産別会議の有

力組合のひとつで、当初から激しい闘争を展開していた。初代の委員長はのちに共産党の国会議員となる土橋一吉。その名をとって「土橋全通」と呼ばれ、過激な運動は常に郵政省当局を敗北に追い込んでいた。

全通は結成以来常に政治と深い結びつきを持っており、当初は共産党路線を歩んだ。その後分裂再建を経て内部的には社会党系対共産党系の対立を抱えてはいるものの、大筋では社会党支持を打ち出している。

全通出身の社会党議員には田辺誠前書記長（全通群馬地区委員長）や大出俊（全通副委員長）の他に衆院五人、参院二人の計九人がいる。また地方議員が約百人、社会党員約六千人を抱えている。つまり、きわめて「政治色」の強い組合であり、イデオロギー的集団なのである。

イデオロギーで固まった集団はさながら宗教団体のような性格を持ち、それだけに闘う相手としては手強い。

森山の就任時、当局は三年越しの「団交再開闘争」に敗北したばかりだった。これはスト処分て解雇され、職員でなくなった全通役員に対し、当局が団体交渉を拒否。全通側が団交再開を求めた事件である。この闘争で勝った全通はその勢いをもって、さらに非常勤職員一万七千人の本務化闘争、四万人大増員要求闘争、特定郵便局の電話自動化反対闘争と、次々に強力な闘争を展開、当局側を押しまくっている時期であった。

これに対し当局側は敗北につぐ敗北の中で、すっかり無気力状態に陥っていた。一時間以内の職

場集会なら見て見ぬふりをするといったルーズな対応を示すばかり。いわば全通のなすがままだった。

「全通に対する郵政省の対応がおかしいとかねがね思っていた。実際に行ってみると聞きにまさるものでした。そこでまず、当時の人事部長で、いまは参議院議員になっている長田裕二君と徹底的に話し合ったのです。毎日毎日、二時間も三時間もね。はじめは長年の慣習やら口約束にこだわっていた長田君も理解してくれるようになって、それ以後、長田君とのコンビで労務の大転換に取り組みました。

まずやったのは一時間以内の職場集会は処分しないという慣習の是正。僕は「ストが禁止されている以上、一分間のストでも処分すべきだ」と主張して、これを改めさせた。このことが今日の郵政の労使関係の基礎をつくったと思いますね。

昭和二十四年の公労法施行以来、郵政省では全通組合員を七万人以上処分しているといっていた。ところがよく調べてみると、給与等にひびく実効ある処分、戒告以上の処分はわずか七千人しかない。名目的に処分していただけなのです。こんなことではだめだ。組合を野放図にさせるだけだと思ひ、在任中の七か月の間に戒告以上の処分を一万五千件出させた。約二十年分の実質的な処分をやったのですから、衝撃も大きかったが、郵政の労使関係はこれで大きく転換し、全通の運動にも歯止めがかけられたと思います」

事なかれ主義の高級官僚にハッパをかける一方、全通の猛烈な抵抗に対決して一歩も後に退かず、

森山は徹底的に筋を通し続けた。まさに「倒すか倒されるか」の勝負を挑んだのである。

天王山―上市・下市闘争

森山対全通の闘いの最大のヤマ場は三十六年の春闘の中で起きた奈良県、上市・下市局の大闘争だった。

この年の春闘で、全通は合理化、電話自動化反対闘争をテーマに掲げた。本来、電話の自動化は電電公社の問題だが、当時、地方の郵便局では電話業務も行なっていた。郵政省ではこの地方郵便局の電話業務を電電公社に移すとともに、手動で行なっていた交換業務を自動化する作業を進めていた。これに対して全通は組合員の職を奪うことになるとして猛烈な反対運動を開始したのである。当局はクビにするとはひと言もいっていないのだが、電話業務がなくなればいずれ職員の数が減るのは必至。そうなれば全通の組合員が減って組合費収入が減る——というのが全通に限らず、官公労の本音なのである。彼等は小さな政府になれば国民の税負担が減るとは決して考えないのだ。

森山が乗り込んできて以来、押されっぱなしの全通はこの合理化反対闘争に勝負をかけてきた。全通結成以来はじめての半日ストを打ったのははじめ、郵便物を意図的に滞留させる「物だめ戦術」などを展開した。

この闘争の拠点となったのが奈良県の上市・下市局の電話自動化をめぐる闘いだ。森山はこの闘いで郵政当局側の「参謀総長」として指揮をとった。



郵便業務を視察する森山郵政政務次官(昭和36年3月)。

電話の自動化は時代の要請であると同時に利用者の要望でもあった。この上市・下市の町でも、町民は自動化を求める運動を進めてきていた。上市・下市局で自動化による電電公社への配置転換対象者は百十名。全通がここを闘争の拠点に決定した時、職員は既に電電公社への転出を承諾して郵政省に辞職願いを提出していた。ところが全通は全国から集められたオルグを、この百十名の対象者の家庭へ強引に泊まり込ませ、無理矢理辞職願いを撤回させてしまった。まさに町民の要望や現地の事情を無視した、非常識な闘争だったわけだ。森山はこうした全通の理不尽な闘争に対して「絶対に屈服しない」という固い決意で臨んだ。

「当時、労使間には事前協議協約問題というのがあった。合理化を進める際は労使で協議し、決定をみなければ実施しないことを約束しろというのが全通側の要求でね。僕は、いいよ。相談しよう。しかし、その協議が整わなければ、つまり組合がOKしなければ合理化や自動化をしないとということではない」と突っぱねた。すると組合側は「物だめ戦術」に出てきた。三十六年一月から三月に

かけて、猛烈な郵便物の滞留が起きました。対抗していろいろ手を打ったりしたのですが、この闘いのヤマ場が三月の上市・下市局の大闘争だった。われわれが上市・下市の電話自動化と、これにともなう職員の配置転換を実施しようとしたのに対し、全通は大量の組合員を現地に送り込み、実力で阻止しようとしたのです。

電話の自動化は局内でいろいろ作業をしなくても技術的には本局で切り替える方法はある。しかし、全通は実力で阻止するという。そこで「よし、実力行使するならやってみろ」と、正面から対決することにした。全通側の暴力行為や不法行為を想定して、われわれと緊密な関係にある弁護士団体・労政法曹団の弁護士を二十人近く現地に派遣しました。「ニワトリを倒すに牛刀をもってする」といった感じもありましたが、とにかく万全の体制で臨んだのです」

三月十六日の切り替えの当日には、全通が全国から動員した千人以上の組合員を現地に集結させ、町には赤旗が林立した。しかし結局、彼らは自動化を阻止できず、切り替えは成功した。また、無理矢理郵政省への辞表を撤回させられた百十名の組合員の大半は、全通の指令に背いて電電公社へ転出してしまふ。全通は「天下分け目の戦い」に敗れたのである。

だが森山は一局面で勝ったというだけでは満足しない男である。

「全通はこの敗北を契機に『事前協議』だけしてくれれば、協議が整わなくてもいい」というところまで譲歩してきた。しかしこれをのむと、全通は後段の部分を伏せて『事前協議を勝ちとった』と宣伝するに違いない。全通はこれをのまなければストを打つともいつてきていた。ここを譲歩する

かどうかを決めるときはたいへんでした。全職員を夜中に集めまして、次官も一票、課長も一票、ヒラも一票で意見を聞いたのです。幹部クラスは「実をとったからいいでしょう」という意見が多かった。しかし下の連中は「徹底的にやらなければだめだ」というのが圧倒的。そこで僕が「この際突っぱねるほうが多数意見だな。よし、大臣にいう」といって、小金大臣に電話を入れて報告すると、大臣も「よしやれ」という。そこで全逓に対して「実をとるだけでなく、名もやらない。ストを打ちたければ打て」と拒否回答をした。すると三十分ほど経って、全逓側はスト指令を解除したのです。大勝利でしたよ。

夜が白々と明けていく。サントリーの角ビンを飲みながら、若い人事管理課の職員が泣くんだよ。戦後、土橋全逓以来連戦連敗だったけど、はじめて勝ちました。うれいですが、といってね。勝った負けたといっちは語弊があるが、とにかく組合との対決で、はじめて当局側の主張が通った事件でした。やはり筋を通すことが大切だとしみじみ思いましたね」

感激の場面に目に浮かぶようだ。かつて官僚に感激の涙を流させた政治家が何人いただろうか。

生きつづける「森山イズム」

全逓は森山との闘いで敗北を喫し、大打撃を受けた。翌三十七年にはストも打てず、労使間の関係はこれを境に、大きく変貌していく。

一般に政務次官といえ、とくに仕事もないことから「盲腸」にたとえられることがある。しか

し仕事をしようと思えば森山のように、ほとんど一人で郵政の労務を大転換させることもできるのである。

「ウナギでもつかみ所があって、そこをつかめば逃げられない勘所というものがある。郵政政務次官なんて普段はなんの権限もないのですが、本気になってやってみると、いろんなことができるんですよ」

森山は在任わずか七カ月で郵政省を去った。が、森山が残した「森山イズム」は生きつづけた。翌三十七年、元全逓の中央執行委員だった福井秀政が、「全逓の闘争至上主義、階級闘争路線についていけない」と反全逓組織を旗上げし、その後特定郵便局職員中心の全特定労組と合併して全郵政を結成した。全逓から数々の妨害、暴力行為を受けながら、全逓に對抗できる力を持った組合に成長した全郵政の存在は郵政の労使関係を根本的に変えた。森山の放った矢が、誤れる労働運動の心臓を射たのである。

官公庁の中で総評系の組合に対抗できる力を持った同盟系の組合は、この全郵政だけである。これを見ても郵政の労使関係が他の官公庁と大きく相違していることがわかるだろう。

全逓にとって、森山はまさに保守反動の政治家だが、その後の労働運動の流れをみれば、森山の敷いた道筋をなぞって流れているのは明らかだ。

全逓は五十三年から五十四年にかけて「郵政マル生反対闘争」を行った。その際、全逓は「郵政マル生は三十五年十二月九日、森山郵政政務次官が誕生したときからはじまった」と森山を攻撃し

ている。森山労政がよほど骨身にこたえたものとみえる。

「マル生」とは生産性向上運動をさす。国鉄は四十八年、大々的な生産性向上運動を行なった。これに対して国労、動労は当局が組合運動へ介入した不当労働行為だと公労委へ提訴。マスコミが組合側を強力にバックアップした結果、国鉄当局が全面的に頭を下げたのが「国鉄マル生」事件だ。全通は国鉄マル生での勝利に味をしめて郵政省にも国鉄同様の不当労働行為、労組弾圧が存在すると主張して、マル生反対闘争を行なったのである。

内藤国夫（元毎日新聞記者）の著書『郵政マル生の内幕・ハガキ無宿』には「森山はマル生運動の元凶。組合を弾圧した大悪人」といったニュアンスの文章が見受けられる。内藤は元総評事務局長で昭和六十一年の同日選挙に落選した富塚三夫（前衆院議員）を「国鉄マル生時代の『戦友仲間』と呼ぶ人物だ。どのような意図でこの本が書かれたかはこれだけでも明白だが、全通や国労など官公労にとって森山は労働運動をねじ曲げた憎むべき存在だったのである。

しかし、彼等の労働運動が正しかったかどうかは、歴史をみればすでに明らかだ。全通の「郵政マル生反対闘争」は年賀状の大量滞留などを引き起こしただけで、なんの成果もあげられないまま消え去ってしまった。当時の全通の中枢にいた人間でも、森山の徹底して筋を通す態度に共感したものは多い。

「最近はその当時の全通の委員長だった宝樹文彦君などがよく僕のところにきますよ。つい最近も僕が切手収集家なのを知って、外国で切手をもらってきたんで差し上げます」と沢山の切手をプレゼン

トしてくれました」

六十年十一月、郵政省は新たな労務管理の指針を決め、全通に理解と協力を求めた。「郵政マル生反対闘争」以後、柔軟路線に転換した全通がようやく「話し相手」になり得ると当局が判断するに至ったからだ。

この決定を受けて六十年末、自民党本部で開かれた労働問題調査会で会長の森山は郵政当局に対しこう語った。

「全通も上層部は確かにわかってきたようだ。これまで多くの人が努力したからこそ、ここまでのことというのを忘れてほしくない。今後どうなるかはわからないが、とにかく労使関係は筋をたがえず、常にエリを正してやってほしい」

居並ぶ郵政省幹部は森山の話真剣な表情で聞きいていた。森山の郵政省に対する大きな影響力を垣間見せた一幕だった。

内藤国夫は「ハガキ無宿」の中で森山について「その是非はともかく、驚異的な政治力……」と評している。森山の影響力はその後も郵政労使の間では健在だった。最後まで大きな問題が発生するたびに関係者が必ず、おっとり刀で麴町の森山事務所に入りしめていたものである。

森山先生の想い出

信越
九州

元郵政監察局長

板倉豊文美

森山先生が郵政政務次官をなさっておられたのは、昭和三十五年十二月より翌年七月までの約七か月間である。当時、私は郵政省人事局の労働係長兼課長補佐として労務関係の仕事をしていた。ご在任中の七か月間、私共は日々生起する労使関係の細大の事件を教材にしながら、特に、電通合理化闘争の上市・下市事件の時などは明け方の五時頃まで政務次官室で徹夜に近い会議が行なわれ、その都度先生から、「労働問題の存り方が天下国家の平和と発展に如何に影響が大きいものであるか」「組織の経営・管理の衝に在る者は正論とどうか筋を通すことに鬼神の如き勇氣をもって行動すべきである」ことを教わった。

先生は自民党の「労働問題調査会」(労働調)の会長代理や会長を長い間やっておられたので、私共は先生の政務次官在任期間中だけでなく以前からまたその後においても長い間、当方から情勢報告をしたり、種々とご指導を仰いでいたりしたものである。

戦後日本の労働組合運動はGHQの保護助長の政策もあって短期の間に燎原の火の如く

全国に拡大していき、労働組合運動というよりは、軍国主義的風潮が消滅した空虚の中にそれにとって代わって一種の国民運動の様相をもって展開された。「昔陸軍、今総評」との評などはそれを物語るものである。

そして、労働組合運動は多分にマルクス・レーニン主義と結びつき、労働条件改善、経済闘争の名の下に「社会主義社会の樹立こそ労組運動の究極目標」との政治闘争が、違法不当、常軌を逸脱した大衆による実力行使の形をとって、四季を通じ年中行事となっていた。特にこの傾向は「親方日の丸」の公務員関係の組合運動に顕著であった。

一方、使用者側の状態はどうであったか？労働組合闘争という滔々たる大河の前に、ほとんどの経営者や管理者は気を吞まれて萎縮し、諦観し、無気力となり、理不尽ともいうべき闘争至上の行動を放任し、筋の通らない一方的な妥協を強いられていたものである。任に耐えられなくなった経営者や管理者の中には、自殺をすとかノイローゼに罹るとかの状況がよく見聞される状態であった。また、倒産する企業も増嵩したものである。

このような現状を凝視するとき「日本の将来はいつたいどうなるであろうか？」という危惧と疑問は心ある人達の齊しく感じるところであった。

森山先生は終戦直後から政治家として、憂慮すべきこの状況を痛感せられ、熱血漢であられた先生は直ちに行動の人となり、政治家としてのエネルギーの大部分を「日本の労使安定」のために傾注されていたようである。

先生の行動と説得は、立法、司法、行政、言論界、教育界等々多方面に亘って行なわれ政府関係の経営者、管理者等の集会（労調朝飯会）を召集しては、先生はよく面を犯して激怒し、叱咤激励しておられていたようである。これは、「萎縮し、無気力、消極的姿勢をとっている人達に勇氣ある行動をとらせる」には、オペラートに包んだ耳障りのいい説得調の紳士的態度よりは、野性的強烈な言辞、動作をもってショック療法を用いた方が即効性があるという人間心理を考慮された先生独特の演出ではなかったかと思われる。その頃、先生はよく「僕は選挙の得票には結びつかない、むしろ減票にもなりかねない憎まれ役の労働問題に献身しているが、政治家は誰もがそれを敬遠しがちである。しかし、誰かが犬馬の勞をとらなければ、日本の将来を思えばやらざるを得んのだよ。君！」と眼鏡の底の細い目を一層細くされニコニコ微笑しながら話しておられたものである。

最初の頃は、森山先生の硬骨漢ぶりに若干の抵抗感を持ち、敬遠がちであった人達も先生の熱情と真意が理解できるようになり、森山先生と言動を共にする人も増え、その勢力は各方面に浸透拡大されるに至ったものである。

今日、日本は世界の中の経済大国として評価されているが、これは終戦直後の国情等からは到底想像もできなかったことである。この経済発展の原因については「国民の勤勉性」「戦後政治の安定性」「最近の日本の労使安定」が挙げられているが、「日本の労使安定の樹立」については、森山先生は最高最大の貢献をして来られた人ではないかと思われる。

先生は極めて誠実で慎重なお人であられた。先生が政務次官（在任中、全通は闘争戦術の一環として「勤務時間中の職場大会戦術（違法行為）」を頻繁に行なっていた。郵政省はこれに対し「一時間以上の職場大会参加者」に対し戒告処分（昇給延伸がされる）をもつて臨んでいたが、組合はさらにその裏をかいて五〇分―五五分の時間内職場集會を繰り返すようになった。そこで先生は「三十分以上の参加者全員を戒告処分にせよ」と強く主張された。事務当局はその中間をとって四十五分以上とする折衷案を作って、先生の決裁を仰ぐこととなり、その使者として私は午後十一時頃先生のご自宅へ伺った。先生はしばしお考えになっておられたが、電話機をおとりになり、当時国鉄の職員局長であった河村勝さん、労働省の労働組合課長であった辻英雄さんに処分量定の可否を打診された。電話を終わると「ご両人とも、まあいいではないですか、ということだから……」とその場でサインで決裁を下された。

それからもう一つ。暮の全通闘争が済んで翌年の一月末に先生は局長、課長、私の三人を笹井カントリークラブでの慰労ゴルフに誘って下さった。最後の二ホールは雪となり、みぞれが激しく降り初めた。三人は寒くて手がかじかみプレーを中止したい気持ちがあつてそれこそ雑なプレーで終わったが、先生は最後まで平常とお変わりなく、特にパターは慎重に時間をかけてやっておられた。

このことをもってみても、先生は人間として政治家として実に立派で、その誠実さと

慎重さが窺知され、先生に対する驚嘆と畏敬を新たにしたものである。

さらに、先生は極めて人情深いお方であられた。私は昭和四十年に本省の課長補佐から大阪郵政局の人事部長に転出することとなった。その時、先生は私のために省の次官、局長、課長等七―八人を同席させて、赤坂の料亭「司」で盛大な送別の宴を催して下さい。思うに、その時の先生の御心情は「板倉君は私の息のかかった男だから今後ともよろしく……」という言外の言をお含みになっておられるように感じられ、大政治家が一介の課長補佐のために、これ程の御心尽くしをして下さることを思えば、全く恐れ多く感激の極みであった。

その後も銀座のすし屋に連れて行って頂いたり、暮になると歌舞伎座に招いて頂いたりしたものである。昭和六十二年春の叙勲では私も勲三等瑞宝章の榮譽に浴させて頂いたが、その時の祝電の第一号は森山先生御夫婦からのものであった。御心遣いの細やかさに涙が出る程嬉しかったものである。叙勲発表の当日新聞を開いて先ず目についたのは森山欽司先生の勲一等旭日大綬章受章の文字であった。先生は御自分のことは何もおっしゃらない。他人のことばかりに行届いた御氣を使っておられたことを思うと、われわれ凡人には到底近寄ることのできない人間の高所に存在して居られるのだなということを感じざるを得なかった。

私共の寄る辺であった森山先生という大木を失った今、先生を思い出すたびに空虚と限

りない寂しさを感じる昨今である。

森山先生に教わった数々の教訓を実践することこそ先生の御恩に報いることである、との決意を新たにすると共に、心から森山先生の御冥福を祈って止まない次第である。

合掌。